

# 山田みやこの活動報告

令和3年3月18日(木)

## 「みんなが安心できる暮らしを社会全体で支える」講演会を受講

主催 一般社団法人 栃木県若年者支援機構  
会場 栃木県総合文化センター  
講師 奥田 知志氏(NPO法人 抱樸理事長)

〈個人や家族に任せすぎた役割をみんなで分担している社会をつくる〉

抱樸(ほうぼく)とは原木・荒木を抱きとめること。樸は荒木であるゆえに扱いづらい。そんな樸を抱く者たちは棘に傷つき血を流す。ただ傷を負っても抱いてくれる人が私たちには必要。樸のためだけに誰か血を流す時、樸は癒される。その時樸は新しい可能性を体現する者となる。

このような思いの下、1988年にNPO法人抱樸を立ち上げ社会に居場所のない方とその支援活動を行っている。

支援者はかつて、～してあげているという支援者目線だったが長崎県の大塚先生から当事者目線で、聞く・つなげる(つながる)ということが重要だと教えられた。

孤独と孤立は違う。誰かと一緒にいるから一人になれる。一人になれるためにも一緒にいる。

しかし社会は自己責任論で「迷惑は悪」とする。子どもの自殺要因は約6割が不明。助けてと言えず、逃げることもできない。迷惑や依存を見直すこと、そもそも人間とは何か？

〈自助は周りの応援がある〉

ひきこもりは日本独自の現象。何十年間も親や子どもが引き受けてきた身内の責任「家族幻想」。すべて自己責任、身内の責任というならば社会も、国家も、組合も、宗教も、福祉もすべていらぬ。

ひきこもりは自衛手段で家族はいのちを守る安全基地。家庭は安心してひきこまれるもう一つの場所として家族機能の社会化。

必要なのは空っぽのコップに「愛」という水を誰が注ぐのか、親が出来ないのであれば親と子どもを丸ごと支援する。親が人にしてもらった経験がないまま大人になると、子どもにも経験を伝えられない。「自立する力の伝達行為」を社会的相続という。「人にしてもらったように人にする」

支援は問題解決を目的に、質や知識が求められる。伴走型支援は、一人にしない・繋がりが続ける・質より量で誰にでも出来る支援。繋がっていることで問題が解決に向かう、繋がっていることが必要で横に動いてくれる誰かがいることが決め手。

※長い期間、生活困窮やひきこもりなど様々な困難を抱えた方々の支援を続けてきた奥田氏の伴走型支援。これが当事者にとって求められる支援である。



講演会  
みんなが安心できる  
暮らしを社会全体で支える

日本の子どもの相対的貧困率は「7人に1人」にのぼり、コロナ禍の影響により顕著になったのは、経済や生活の本質だけでなく教育や心の安定の格差でした。本講演会では、実践の中で気づいた人たちが、コロナ禍でより顕著になってしまっている状況を、社会全体で支えるにはどうすればよいかを考えます。

講演 「個人や家族に任せすぎた役割を、みんなで分担している社会をつくる」

2021年  
3/18(木)14:00~16:00 参加費！無料

栃木県総合文化センター特別会議室(先着50名)又はオンライン参加

現地参加：お車でお越しの際は、栃木県庁のパーキングを2時間まで無料でご利用いただけます  
オンライン参加：ZOOMのインストールが必要です。ご利用予定のPC又はスマホの設定をお願いします

お申込 有記QRコードをスクリーン取り、フォームよりお申込みください  
メールでのお申込は下記アドレスよりお問合せ下さい  
tsunagaru@tochigi-yso.org

講師  
奥田知志氏 (NPO法人抱樸理事長・東八幡キリスト教会牧師)  
1963年生まれ。学生時代から始めた「ホームレス支援」に北九州でも参加。草莽野郎を経て、北九州ホームレス支援機構(現 抱樸)の理事長に就任。これまでに3500人以上のホームレスの人々の自立を支援。著書「逃げおくれた伴走者/本の魂出版」、「「助けて」と言える国へ」(改題第一野兵共著/集英社新書)「生活困窮者への伴走型支援/朝石書店」他多数  
認定NPO法人抱樸(ほうぼく)とは [www.houboku.net](http://www.houboku.net)  
北九州を拠点に、困難を抱える者の生活再建を包括的に支援。「ひとりじゃない」という言葉を届ける

とちぎ子ども・若者・地域支援ネットワーク  
運営 | 一般社団法人 栃木県若年者支援機構 | 宇都宮市昭和2-7-5 TEL 028-678-4745 FAX 028-678-4746